

## 掛下 知行

Tomoyuki Kakeshita  
Professor Emeritus of Osaka University  
President of Fukui University of Technology



# 本居宣長「うひ山ぶみ」に見る 学問の学び方と教育

Education Inspired by Norinaga Motoori through His Book of “Uiyamabumi”

現在、世界的規模で大きな転換点に立っていることは皆様ご存知の通りであります。すなわち、食料・水問題、資源、エネルギー、環境問題、感染症の地球規模での拡大の危機、富の偏在と格差の拡大、文化・民族・宗教の対立など、人類の存続自体を脅かす諸問題が顕在化してきています。これらは、自然科学分野と人文社会科学分野のすべてに係わる問題であります。これに加えてわが国では少子高齢化が深刻な問題となっております。ほぼ100年後の2100年には人口が6000万人になることが予想され、これによる労働人口の著しい減少により社会構造の変革は避けられません。これらの問題は、世界規模で早急に対応しなければ、人類の将来は危機に瀕することになるものと言っても過言ではありません。したがって、私どもはこれら問題のかじを取るターニングポイントの真ただ中にいることを十二分に認識し、この変化に正しく対応して、心身ともに豊かで安全な社会を築くことが、いま我々に課された将来に向けての課題であります。

この様な状況において、大学がなすべきことは、今述べました人類に課せられた自然科学、人文社会科学全般にわたる命題に果敢にチャレンジする気概と能力ならびに素養を持った人材の育成を行うことでもあります。したがって、大学は、決して短期的な成果のみを追うのではなく、50年、100年後の将来を見据えた人材育成を大学の活動の真な

る「核」に据える覚悟が必要です。ですので、大学の教育・研究の在り方は、全人格的であるべきであり、学問の府としての学問の深化と社会構造構築への貢献にあると言えます。特に、教育は国家100年の計であると同時に人類100年の計でもありますことから、身を引き締めて慎重にきめやかに深化・展開すべきことであると考えます。言い換えると、教育こそが、今日の課題を解決するものであり、人類を救うものであると行うことができると私は強く信じております。

私は長く教育にかかわってきたこともあり、教育の基盤となる学問を修養する上で感銘を受けた本居宣長の考えをここで振り返り紹介させていただきます。皆様の、お役に少しでも立てると幸いです。

言うまでもなく、本居宣長はわが国の古代の歴史書である「古事記」という書物を読み解いて古事記伝をあらわしたわが国を代表する素晴らしい学者であります。もちろん本居宣長の学問分野は国学と呼ばれる分野であり、理学、工学、情報学等とは異なる分野であります。しかしながら、本居宣長の学問に対する考え方、学問の進め方、学問を始めようとする人への教育は、すべての学問分野に共通した普遍的なもので、かつ、非常に優れた考え方があります。こうした考え方は「うひ山ぶみ」という書物にまとめられています。これは文庫本にもなっており、現代語訳もついていま

すので興味のある方はお読みになることをおすすめします。

「うひ山ぶみ」とは、はじめての山、あるいは新しい山に登るという意味ですので、この本では、新しい学問を学ぶことを新しい山に登ることにたとえています。

本居宣長は新しい学問を学ぶ方法として次のように述べています。「学問というものはただ長い年月飽きたり怠けたりせずに一生懸命続けることが大事である。勉強の仕方は人それぞれで、その人にあった方法を選べば良くそれほど気にすることはない。いかに良い勉強の方法を用いても怠けて勉強に励まなければ学問の成果は得られない。また自分に才能がないとか、時間がないとかいったことであきらめてしまい、勉学をやめてはいけない。とにかく学問というものは一生懸命励めば成就するものだと思うべきである。あきらめは学問が大いに嫌うことである。言い換えると、山に登るとき、人それぞれにあった登り方や道で登ればよいが、途中で飽きたり諦めたりしたら決して頂上にはたどり着くことは出来ない。学問も毎日こつこつと続けるのが重要である。」と教えています。本居宣長ほどの大学者でも日々努力して学問を成就したのです。このことを思うと、私には、身に染みる言葉と感じております。

また学問に対する態度について次のように述べています。「一つの分野の学問でも勉強することは非常にたくさんあり、それらをすべて学ぶことが出来ればよいが、人が一生をかけても無理である。そこで、その中から自分が極めたいと思うことを見つけ出して、それを力の限り勉強するのが良い。これも学問をする上で重要なことであり、人間の能力には限りがあるので自分が興味をもって、突き詰めたいことを決めて、一生懸命勉強するのが大事だ。」と本居宣長は教えています。さらに、「こうした学問の進め方は、学問を志した人には自然に備わっているものだが、初めて学問をする人には、どのように勉強したらいいのかわ

からない場合が多い。そのときにはその学問分野を良く知る人に、十分に相談しながら勉強方法や、学ぶべき事柄などを教えてもらうのがよい。」と述べています。

これは、まさに、大学の役割であり、また教員の役割となるものです。その指導に関しても、本居宣長は、「先生が『これこれこうして勉強なさい』と一つの方法だけを言うのではなく、その人にあった、その人の勉強と努力を最大限に生かして、学問を成就できる方法を教えるべきである。」と述べています。この本を読むたびに、忘れかけていた真摯な気持ちに何度戻ったか覚えていません。

本居宣長は最後に次のような短歌で締めくくっています。「いかならむ うひ山ぶみのあさごろも 浅きすそ野のしるべばかりも」この歌は「初めての山に登るにあたって麻の粗末な着物をまとい経験も浅い私の言うことが道しるべになれば幸いです。」というような意味です。とても謙虚な気持ちになり、心洗われる気がいたします。皆様はいかがでしょうか。その上で、私には、皆様も良くご存じの天才画家パブロ・ピカソの言葉を思い出します。「できると思えばできる、できないと思えばできない。これは、ゆるぎない絶対的な法則である。」ピカソの様な天才ですら、自らの芸術活動において、様々な課題に直面し、それを、このような考え方で乗り越えて、素晴らしい絵画を生み出してきたのです。ピカソほどの天賦の才能がないにしても、私たちも、常に、このような考え方や、また、本居宣長の「うひ山ぶみ」に見られる精神をもって、上記した問題の解決を図り、世界の持続的発展に貢献する研究成果を挙げるのが大切であると強く思っています。

#### 参考文献

濱田浩一郎:本居宣長『うひ山ぶみ』,致知出版社,(2017) ISBN978-4-8009-1164-3